

## 【選考委員会総評】

今回の指名コンペティションには、現代の建築や都市環境をめぐる6案——巨大な公共土木建造物の決定プロセスを検証するプラン（阿部仁史案）、現代社会における音の身体性・空間性の可能性に関わるプラン（小淵祐介案）、生活者の視点から建築資源の新しい見方を提唱するプラン（貝島桃代案）、建物の敷地限定性を超えるべく「植生」や「ランドスケープ」を再考するプラン（田瀬理夫案）、多様な文化資源の発現・連繋の場として東京中心部の東北エリアを分析するプラン（中島直人案）、都市や文明の起源ともいえる水の公共性（＝井戸）を空間化するプラン（橋本純案）が寄せられました。

選考委員会では、建築、土木、都市環境、都市計画など多岐にわたる応募案を、テーマや分析方法の斬新さ、展示対象とする建築・デザイン手法の先進性、展覧会としての実現可能性や見ごたえ、地域性（日本らしさ）と世界性の兼ね合いなどさまざまな観点から再検討いたしました。その結果、貝島桃代氏による応募案「東京発、建築民族学—暮らしのためのガイドブックとプロジェクト」を、あらためて第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館のテーマに選出いたしました。

貝島桃代氏による日本館テーマは、海外研究者および日本の美術館キュレーターとのチームにより、貝島らによる「メイド・イン・トーキョー」プロジェクト（展覧会および建築ガイドブック、1996年～）がアジアや欧米各地で呼び起こした同趣向のガイドブックなどを再検討しながら、東京発のグローバルなディスカッションを深化させるものです。

建築はもともと複数の機能を一つの箱に収めたものですが、貝島のいう「建築民族誌」とは、これまで注目されなかった建築の雑多な機能の雑居性に着目して、都市の生活者の視点から建築の生態なり、都市の現実にアプローチする試みです。ゼロからの創造ではなく、プラス・マイナスの遺産を遣りくりしながら如何にして未来を構想するか、という方向に議論をシフトさせる点に特色があります。日本の現代建築、都市環境の地域性に立脚しながら、地域を超えたグローバルな課題に応える点などが、国際建築展日本館にふさわしいテーマ設定として評価されました。

（松本透 国際展事業委員会委員長、長野県県民文化部信濃美術館整備担当参与）